閉　会　の　辞

荒　木　光　彦（京都大学高等教育教授システム開発センター長）

センター長としてご挨拶させていただきます。センター長の立場を脱してしまうかもわかりませんが、全体の議論をおうかがいしての感想を申し上げます。先ほど半導体の専門家の方から工学部としてのご質問がありました。私も自動制御の専門家でございまして、やはり工学部の電気工学専攻に属しております。我々から見ますと、本日の議論については文化の違いを感じるところもあり、それがかえって非常に有益であったと思っております。具体的な側面につきましては、授業のオープン化とかコミュニティーが話題となり、それを築き上げなければ駄目だという話になっておりました。自分のところ（すなわち京大の電気電子工学科）の授業、より広く言えば教育のあり方を見てみますと、少なくとも学科の中ではオープンでありコミュニティーができているというのが自明であり、それなしでは学科としての教育が動いていかないというのが実状です。もう少し説明してみます。電気電子の教育で何が中心になっているのかというと、実験、研修、演習です。これは１人の教官が個別にやるわけではありませんので、全ての教官が上記の中のどれか1つの授業に参画し、１人が休めば他の人が補完して、指導もしレポートも受け取ります。レポートを受け取る時には当然質問をさんざんして、学生を「いじめる」と言ったらいけないですけれども、「教育」します。そういう教育方法ですから、教官の間の協調がとれていないと、どうにもしようがないので、内容から方法までオープンであり、１つのコミュニティーとしての文化を共有しております。一方、講義科目についても、隣の人がやっている講義の内容をある程度知っていないと、自分の講義は組み立てられません。というようなことで、FDというのは、「我々の日頃の行動をある程度システム化して、可視化する」ことである。「こんな具合に議論をし、教育内容を検討し、実践していますよ」というのを、外部の人にわかり易く説明すればよいのでないか、というのが私の感覚であります。それともう１つは、教養部と学部というのが分かれていたというところで、その間の断絶が過去には確かにあったし、今でも存在すると思います。ただし、それを埋める努力を、ここ数年非常に積極的にやっておりまして、少なくとも数学の先生とはいっしょに酒を飲みながら、ぶつぶつと「学生の悪口を言う」わけでは決してありませんが、「近ごろの学生はどうのこうの」という会を持っております。そういうところをさらに広げていって、教育システム全体に反映させていく努力は、必要だと思いました。それぞれの学部、専門に特徴がありますから、一般的にFDと言ってしまって同じことをやろうとすると非常に難しいころではありますが、分野別に考えてみれば、すでに熱心に取り組んでいることを表に出していくだけで十分な面も多く、別にそれほど悲観的な、やりにくいことでもないような印象を持ちました。最後の挨拶にしては、いらないことを言ってしまったかもしれませんが、皆さんお集りいただいてありがとうございます。この後は懇親会ですが、この部屋を使用いたします。準備がございますので、懇親会へご参加の方には隣の１、２号室で、入りきれるかどうかわかりませんけれども、しばらくお待ちいただくようお願いします。